

ものちに新居浜の労災病院長になられ、改めてご診察を頂く機会を得たことは有難かった。こうして、二中以来私は眼底出血という爆弾を抱えて来たが、いろいろな先生方にお世話になりながら幸いその後出血の再発もなく、眼を酷使する商売にもかかわらず、今日まで何とか私の眼は働いてくれた。

他方、引き揚げ後も“四の四”弁当箱は私の寮生活や下宿生活に必需品として活躍し、配給のサツマイモ容器、パン焼用、あるいはザラメの入れ物として、無くてはならぬ私の弁当箱として働いた。これが本来の母の弁当として家に戻ったのは大学に入った昭和25年のことであった。食糧事情もかなり好転し、暫くは弁当を持って通学したが、この頃には長年にわたって酷使された私の“四の四”弁当箱はひどく変形し、きちんと蓋が合わず、ただ乗っかっているほどになっていた。これでは持ち運びに不便なので、いつの間にか私は弁当持参を止めてしまった。しかし、私と苦楽を共にしてきた分身のようなこの弁当箱を母も捨てようとはしなかった。こうして私の“四の四”弁当箱は再び本来の任務を離れ、今度は台所に永住することになった。その台所定住は以後45年間、家庭を持ったその後の私の生活でも続いて現在に至っている。この大きさの蓋付容器はよほど重宝と見え、いろいろな料理材料の容器として台所で活躍してきた。私の眼と同様、この弁当箱も意外と長持ちし、今では豆腐入れとして冷蔵庫に収まっている。(「砂丘」7:22-26、1996)

「旅順について思うこと」

「旅順」は私にとって、少年時代は「内地」を思わせ、戦後、内地に住むようになってからは「ふるさと満州の一部」という位置を占めている。

夏休みといえば、一家で旅順に遊び、黄金台の海水浴で象徴される昭和10-15年頃の旅順は私にとって子供時代のハイライトといえる。そして、子供時代のこの旅順に終止符をうったのは短い工大予科と興亜寮の生活であった。

私は補欠入学生の一人で、本来は日本の学校に入学するはずのところ、終局時段階に入った戦争で内地への渡航が不可能になったため、旅順工大予科へ補欠入学を許された一人である。私の出た奉天二中からは山本礼君、奉天一中からは村上見三君が一緒だったように記憶している。短い予科生活の記憶は断片的かつ曖昧で、何事もはっきりとは残っていない。しかし、何といても興亜寮の生活が特に印象に残っているとってよいだろう。もっとも、それとても甚だフラグメンタルで、同室のクラスメートの顔や名もうる覚え、ここで振り返り述べるほどまとまった印象記にはならない。

初めて家を離れ、毎夜のように行われる上級生の訪問ストームで象徴される興亜寮のすこぶる特殊な集団生活には、予期はしていたものの、適応するのに手間どった。それは食事についても言えた。私の舌と胃に今でも焼きついているのは寮のお菜で、それは明けても暮れても太刀魚と落であった。

旅順における寮生活でまぶたに焼きついているのは終戦の日、8月15日に見た青天白日旗である。それは中国人家屋の前に色も鮮やかにひるがえっていた。

雑音の多い天皇陛下の玉音放送を寮の玄関前で拝聴したあと、動揺する心を押さえて私は何

人かの級友たちとだらだら坂を歩いて新市街へ向かった。そのとき、途中の支那家屋のあちこちに青天白日旗がひるがえっていることに私たちは気がついた。その当時としては信じ難いこの光景を見、私たちは日本の敗戦を容認せざるを得なかった。彼等がこの日を予期し、そして待ち続けていたことは明かであった。9月4日、私は旅順高校の友人たちと大連へ行った。そしてダイヤも乱れ、行き先もあてにならぬ汽車に乗り、どうにかこうにか奉天の実家に帰ることができた。翌年、夏の盛りに引き揚げ、四国の父の実家に住むことになった。翌春、転入学試験に運よく通り、四国の高等学校へ、満州医大予科のK君と二人で転入学した。全くの幸運だったと思う。秋には外地の学校や軍の学校から転入生がかなりの数で仲間入りし、その中に旅順工大予科生の佐々木恭輔君が居り、同じ寮に住むことになって心強かった。ここで戦後自由になった高等学校という環境に身を置き、個性豊かな先生方や友人たちに恵まれ、興亜寮とはまたひと味ちがう寮生活を送った。

本人の意思と無関係に出逢う先生、先輩、友人、そして偶然の運によっておかれる環境、そしてドラスティックに変換する歴史の流れ、これらすべてが一個人の生活やその将来に避け難いインパクトを与える。とくに昭和ひとけた前半の、旧興亜寮生を含む外地にいた我々は、特異な運命に弄ばれながらも、人生を精一杯に生きた旧制の悼尾を飾る世代といえるように思う。

長年、研究と教育に時を過ごし、気がつけば還暦を過ぎた今、「旅順」の淡い記憶は我が人生における運命において特異な位置を占めていることに気がつく。(旅順工科大学悼尾会「悼尾を飾る－最後の旅順工科大学予科生の記録」1990)

「ふるさととは遠きにありて想うもの」

1. 「男は辛いよ」

先日、「寅さん」の山田洋次監督の話をテレビで偶然きいた。山田監督は大連から引き揚げたそうで、私たち同様、故郷喪失の人である。“俺には妹が住んでいるふるさとがあるから、何時でも帰れる”という寅さんのせりふは、ふるさとのない山田監督が自分に言えないことを寅さんに言ってもらう、といういわば自分の願望である、という話しであった。なるほど、寅さんと山田監督のあのペースは私たちに共感を与えるはずだ、と私は思った。私自身、この大阪に住んで半世紀近くなるが、いまだに「大阪に住むことの必然性」を実感しない。今だに大阪は私にとって偶然住んでいるところ、という気持ちが抜けない。長く満州—私の場合は奉天、大連、旅順—という「ふるさと」を想い続けてきた。しかし、今の私は「ふるさととは遠きにありて想うもの」に徹しようと努めている。

2. ふるさと帰り

1978年秋、私は待望のふるさと帰りの機会を得た。毛沢東の死と四人組の逮捕によって文化大革命が終ってからあまり時が経っていない頃であった。実は北京に着くまで奉天に行けるかどうか確かでなかった。中国科学院の招きで訪中の話しがあったとき、私はふるさとの奉天に行けるのなら北京に行く、と返事をした。先方は、“そのように努力しますからぜひ北京に来てください”、と言ってきた。北京空港に着いたとき、出迎えの科学院の人が“ご希望どおり奉天を訪問して下さい。遼寧飯店を予約してあります”と伝えてくれた。私の心は躍り、夜も眠れ